

団地再生 電通大生が奔走

寝屋川でプロジェクト

老朽化、高齢化 改修案 住民意見反映へ

高度経済成長期に寝屋川市に建てられた大規模団地で、地元の大阪電気通信大（寝屋川市）の学生たちが団地の活性化プロジェクトに取り組んでいる。老朽化や住民の高齢化など、団地が抱える課題の解決策を、建築を学ぶ学生と住民が一緒に模索する取り組みだ。

（福永健人）

「近くの小学生が遊びに来られるように、絵本やおもちゃを置いたらどうだろう」「キッチンを広くして、カフェをしてみたい」「外壁を使って映画鑑賞ができるかも」

今月11日、寝屋川市三井が丘の「香里三井団地」の集会所で、住民たちが口々に意見を出し合った。彼らが囲むのは、その集会所を50分の1の縮尺で作った模型。大阪電通大の学生たちが用意した物だ。

鉄筋コンクリート造り平

屋の集会所（約100平方

メートル）は建築から半世紀を過

ぎ、来年度に内装などの改修工事を行う。この日の催しは、学生たちが住民から

集会所の長所や改善してほしい点を聞き出し、工事の設計に反映させることを目指した。模型は、意見やアイデアを書いた付箋ですぐに覆われた。

イベントで交流深め

同団地は1969年から約20年かけて24棟が建造され、約1000戸がある。当初は子育て世帯が多く入居したが、子どもの成長、

独立とともに親世代の高齢化が進行。現在は、世帯主の5割が65歳以上で、空室率は1割を超える。

所有・管理する府住宅供給公社は2022年、団地の再生を図ろうと、大阪電通大、市とまちづくりに関する連携協定を結んだ。同年9月から「ニコニコのデザイン」プロジェクトと銘打ち、学生が参加する交流イベントを始めた。

学生は住民と一緒に焼き芋を作ったり、近くの竹林から切り出した竹でできた灯籠で団地をライトアップしたりして交流を深めた。打ち解けた住民から、団地ができて間もない頃のエピソードも聞き出した。

子どもたちでにぎわった夏祭りや、今よりも密接だった近所付き合いなどの思い出話から、公社の職員も気付かなかった住民の「団地愛」が浮き彫りになった。

学生の中には、取り組みを通じて環境や雰囲気が入り、団地へ引越す人も現れた。

生の現場学びの機会

プロジェクトには学生の研究や教育の面でも意義がある。実際の建築が抱える課題や可能性を、生の現場で学べるからだ。

代表の工学部建築学科4年、上川海人さん（22）は、住民、公社と一緒に、当事者として携われることにワクワクする。人と建物の理想のあり方を現場で学びたい」と話す。



①団地の集会所について、改修のアイデアを住民に聞く大学生ら②大学生が団地住民と交流するために企画した焼き芋イベント（2022年11月、府住宅供給公社提供、いずれも寝屋川市で）

プロジェクトを当初から支援する住民の一人の山本晃久さん（76）は、「外部の大学生の視点や発想を通して、気付かなかった団地の魅力、課題も浮かび上がってきた。住民も自分ごととして真剣に考えるようになった」と期待する。

公社でプロジェクトを担当する森川清美さん（25）は「第三者の学生が入ること、住民の本音が引き出されることもある。団地自体のデザインや他団地の運営にも取り組みの幅を広げていければ」と話している。